

“うんどうかい”から“運動会”へ

甲斐 久美子

“もうすぐ運動会！”というこの季節を迎えると、私はそわそわとして落ち着かなくなっていたことを思い出します。毎年必ずやってくる行事の一つであり、私の中にそのイメージが固定化してしまっていたこと、また、保護者の方を招いての行事ということ、特別にそわそわしていたのだらうと思えます。一方、初めてこの季節を迎える子どもたちはどうであったかという……、「そとでおべんとうたべるんだよね」「みんなでおでかけするんでしょ」

と、それぞれに“とくべつ”なイメージを抱き、そわそわと過ごしていました。そして、“もうすぐ”に向けての準備や、そのような雰囲気の中で盛り上がる“うんどうかい”“ごっこ”など、初めて目にする周囲の変化に心を動かし、またひと味違う“そわそわ”を感じていたようです。

三歳の子どもたちは、そんな日常からどのように“うんどうかい”を思い描いていくのでしょうか。“うんどうかい”から“運動会”へ、日常か

ら非日常に移行するこの行事を初めて経験する三人の子どもの様子を思い起こし、彼らにとっての「運動会」をここで改めて見つめてみようと思います。

さいたま市・大宮に程近い住宅地にある私立幼稚園。入園当初のY（三歳・男児）は、大好きな兄のいない（前年度卒園）幼稚園に不安な気持ちを抱えながら保育者（私）のそばで一日を過ごしていました。母親から離れ難い日もあり、保育者に顔だけ見せて家へ帰ることもありました。たたかいごっこがなにより好きなYは、誰かと一緒に遊びたいという思いはあるものの、思い通りにはいかず、物足りなさを感じていたようです。

自宅が近く登園時に一緒になることがあるT子には、母親同士のかかわりもあつて次第に親しみをもつようになっていきました。T子の何気ない優しい言葉や行動に、安心して自分をだせるようになってきたY。T子が大好きなSにも気持ちがあくようにな

り、いつしか三人で過ごすことが当たり前になっていきました。「○○レンジャーごっこやろう！ほくが○○で、Tちゃんは△△ね。Sくんは□□だよ」。自分の誘いを快く受け入れてくれる二人に気持ちがあぐれ、登園するとすぐに声をかけるY。T子もSも、「なりきる」面白さを新鮮に感じ、自分たちの家をつくったり園内のあちこちを巡り歩いては、そのやりとりに夢中になっていきました。不安な園生活において、ようやく見つけたYの抛りどころとなる遊び、そして友だち。夏休みを迎える頃には、「おはようございます！」と、保育室をめざして走って登園するようになっていました。

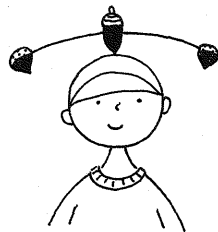
さて、彼らにとって初めての運動会シーズン。小学生の兄の運動会を見たYは、「よいいどん、するんでしょ。がんばれーっていうんだ」。兄の姿が強く心に残っていたのでしよう。保育者や友だちに目を輝かせて話すYは、運動会を見たことがある、誰

よりも自分は知っている、とても誇らしそうにしています。私はそのイメージがどのようにY自身
の“うんどうかい”につながっていくだろうと期待
していました。

国旗作りや入場門作りなど準備がすすんで、運動
会ムードが園内に漂い始めると、昨年の運動会を思
い出した年中・年長児によって“うんどうかい”ごっ
こが始まります。その傍らで、いつものようにたた
かいごっこをしている三人、なんとなく目を向ける
ようになり、それぞれに心を動かすようになってい
ました。

そんな頃のある日、ダンスを楽しむ子どもたちの
活気に満ちた雰囲気に興味をもったSは、「ぼくも
やりたい」と二人を離れダンスに飛び入り参加。
Yは、「S! もうぼくのうちにこないで! こん
どから〇〇かしてあげないから」と、大声で叫び
懸命に呼び戻そうとしますが、夢中で踊るSには一

向に届きません。「ぼく
はやらない。Sなんても
うしらないっ。Tちゃ
ん、ふたりであそぼ
う」。Sを見て気持ち



揺らいでいるT子に気づいたのでしよう、T子を行
かせまいと必死のYでした。T子は、そんなYの表
情を見て何も言わずにその場に留まりました。

Yには“ダンスなんていやだ、おんなのすること
だ”という思いがありました。おまけに大好きな友
達を自分から引き離してしまうなんて、ダンスのあ
るうんどうかいなんて……。Yにとっては“こんな
はずでは”という思いが重なり、ぶいっと顔を背け
たくなる“うんどうかい”となっていきました。一
方、ダンスを始め、かけっこやそのほかの“うんど
うかい”ごっこにも気の向くままにかかわるSにと
っては、“おもしろい! たのしい!”でいっぱい

“うんどうかい”です。奔放なSを目で追うT子、一緒にやってみたいという気持ちは膨らむものの、Yのことも気にかかり、もどかしい毎日を過ごしていました。運動会を間近に控え、様々な気持ちを抱えて過ごす子どもたちの姿に、私は心のどこかで焦りを覚えていました。大人の期待する子どもたち全員が楽しく参加する“はず”の運動会をやはり意識している自分に、そして、楽しくかわるSに安心している自分にこの時気づかされました。

“うんどうかい”が、“運動会”になること。保育者として子どもに伝えたいことはあるとしても、それぞれの子どもが感じる楽しさがあり、イメージがあり、それは日々の遊びを通して膨らんでいきます。それぞれのありのままを感じとって、その楽しさが続くような雰囲気は何よりも大切にしたいものです。もちろん「？」という気持ちを安心してさせる雰囲気も。子どもたちの心動くその時を捉えられ

るよう柔軟な姿勢で待ち、一人ひとりの遊びや三人の関係をつまみおす機会の一つとして、彼らとその時期を過ごそうと私は子どもたちの気持ちに触れたいと思いました。

ある日の午後、T子は靴箱の前に立ち、踊っているSの姿をじっと見ていました。私はT子に「いいで。先生はY君と一緒にいるよ」と、さり気なく声をかけました。はっとした表情で私の顔を見たT子、しばらくうつむいていました。「……うん」T子は園庭へ飛び出し、Sの側へ駆け寄りました。私はT子の姿に呆然とするYのそばに寄り、「一緒にいようね」とつぶやきました。それどころではないYは返事もしません。楽しそうな二人の姿を黙って見つめていました。

運動会までの数日、T子は何か吹っ切れたようにSとダンスに参加、好きな音楽にのって心とからだですべての雰囲気を存分に楽しんでいました。そして、

いつものYとのごっこ遊びにも変わらずに夢中でした。二人がダンスに参加している間のYは、離れたところからちらちらと見ていたり、自分の遊びに必要なものを黙々と作って（待ちながら）過ごしていました。二人を横目で見ると、自分の遊びに必要で、二人を横目で見ると、自分の遊びに必要で、日々揺れ動く気持ちと向かい合いながら大きくなっているのだなと感じていました。

運動会は園から徒歩五分程の小学校校庭で行われます。場所を移しての運動会は、子どもたちにとっではそれだけでも「とくべつ」な出来事です。当日、Yは家族と一緒に、緊張した面持ちで校庭にやって来ました。それだけでも私は嬉しく、「おはよう！」と思わず声を上げてしまいました。「……おはよ」と、もじもじしているY。プログラムが進み、年少組のダンスが始まると、Yは私にびったりとくっつきました。そして……、からだを動かした

のです。T子もSも「Yと一緒に」がとても嬉しいようです。大はしゃぎでした。なぜYは私のそばにいたのでしょうか？ 動きがわからなかったからでしょう、と母親の笑いをこらえたコメントがありました。私はT子やS、家族、保育者への「ほくはやつてるぞ」というアピールのように感じました。あるいは、いつもとは違う状況に、そうせずにはいられなかったのかもしれない、一緒にしなければ今日の居場所はないとYに感じさせてしまったのではと、一方で思わずにはいられませんでした。

Yにとって、子どもたちにとって、初めての「運動会」はどのような日となったのでしょうか。子どもたちの目には何が「とくべつ」に映ったのでしょうか。いつもとは違う状況に、またはプログラム外のところ「とくべつ」を見つけたのでしょうか。当日までにそれぞれに感じた楽しさや面白さ、戸惑いやもどかしさといった心の動きが、後にその日を「と

くべつ”にするのかもしれませんが。

運動会を終え、それから三月まで“運動会のダンス”に興じていた子どもたち。あの日の“とくべつ”な雰囲気を思い出しながら、いつもの遊びとして楽しみました。しかし、Yはダンスには見向きもせず、過ごしていました。Yなりに“とくべつ”に感じた“運動会”であつただらうと思います。

子どもにとって心を解放させてからだを動かす、友だちと一緒にルールのある遊びをすること、またその中で様々な気持ちを楽しむことはとても大切な体験です。どの年齢においても、うまく“みせる”ための練習の日々をおくるのではなく、その時々々の面白さが当日につながるように、その過程を見つめていきたいと思っています。また、“うんどうかい”“ごっこが盛り上がるその傍らで、いつもの砂遊びやモノ作り、〇〇ごっこに没頭する子どもたちにも変わらずに目を向けたいものです。その時間が保

障され充実してこそ、新しい経験が豊かになっていくのではないのでしょうか。

運動会を待つ大人側にとって特別なイベントであることはさておき、子どもたちにとってその日はどんな“とくべつ”な日となるのか。私たち大人とは違う、粹のない“うんどうかい”を楽しみながら、どんな“運動会”を創り出したのか。そして、その日を経験して感じた“とくべつ”はどのように“いつも”へとつながっていくのか。それぞれの“運動会”を通して、新たな何かが始まることを期待しながら子どもたちとその季節をゆつたりと過ごしていきたいと改めて思います。日々、揺れ動く子どもたちの心に気づき、寄り添える大人でありたいと願っています。

今年、彼らにとって三回目の運動会です。Y・T子・S、それぞれに新しい“とくべつ”に出会える季節でありますように。